

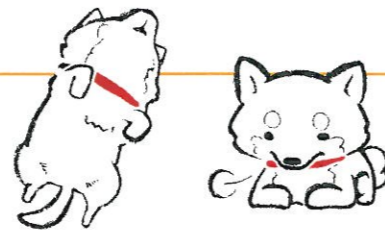
うちの子ががんになったら ～家族と「がん」を持つ子に対するケアの進め方～

麻布大学附属動物病院 川村 裕子 先生



プロフィール

- 1991年 麻布大学獣医学部獣医学科卒業
東京都内動物病院勤務
- 1993年 麻布大学獣医学部附属動物病院研修医
同大学内科学第二講座所属
- 1994年 麻布大学獣医学部獣医学科 放射線学講座研究生
同大学附属動物病院腫瘍科所属
- 1999年 麻布大学附属動物病院腫瘍科研修医
- 現在 腫瘍科研修医の傍ら、7箇所の動物病院で腫瘍科診療に従事。
日本獣医がん学会 理事



講演要旨

有史以来人は動物とともにありました。あるときには友人として、あるときにはともに戦う同士としていつも傍らにあって我々を支えてくれました。そして精神的に過酷な時代といわれる現代にあって彼らは、家族として私たちを救ってくれるかけがえのない存在となっています。それゆえ近年、動物に発生するがんが大問題になってきました。以前はがんになるほどの長寿を動物に期待することは、社会的にも獣医療的にも難しいことでしたが、ここ数十年における生活レベルの向上と動物への精神的依存が動物の高齢化という現象を生む結果となりました。この根幹をなすものは、世界に誇れる、我が民族の生類に対する愛情の深さに他なりません。それゆえに今、がんという不治の病を前に命の量と質を考えると、それこそ個々の人生観をも揺さぶるほどの大きな問題となって迫ってきております。現在、犬におけるがんの発生率はヒトの数倍といわれており、中高齢になった動物と暮らす方の数人に一人は、この問題と対峙しながら動物との闘病を強いられることとなります。そのとき、我々がどう闘えば最善を引き出せるかは、命に対する揺るがない価値観と精神力、そしてそれを支えるがんとその対処法に対する深い知識にかかっています。

1.がんとはどんなもの？

私たちにとっての危機はいつも本当にすぐそこにあるのです。それを何者かがぎりぎりのバランスで切り抜けてくれています。表面上は何もおおらず生活も変わりません。しかし、それは必ずそこに何度も何度も生まれてきて、少しでもその存在を許さずものなら爆発的に増殖を始めるのです。まさに、私たちの一番身近にあるテロリスト集団それが「がん」なのです。そもそも腫瘍とは、「本来自己の体内に存在する細胞が、自律的に無目的に且つ過剰に増殖する状態」と定義されます。すなわち腫瘍は、患者の身体が生み出したものに他ならず、それがひとたび生まれいずると、本来の存在意義はすっかり無視し、患者の身体を最大限に利用して生き延び増殖していくのです。ただこの腫瘍には2つのタイプがあり、発生するにはしたが、発生した場所でのみ増殖し、それが比較的ゆっくり大きくなる、あるいは途中で成長を止めてしまう、このような腫瘍を「良性腫瘍」と呼びます。これに対し「悪性腫瘍(がん)」は、発生した途端に周囲の組織を破壊しながら爆発的に増殖し、途中で成長を止めるなどということは決してありません。そしてさらに悪いことには、発生した部位(原発病巣)だけではあきらまず様々な経路を伝い他の臓器に移動し増殖を続け(転移病巣)、ついには患者の体を死に至らしめるまでその活動を止めないという、極めて攻撃的な性質を持った腫瘍ががんなのです。

2.がんの治療とは？

現在、獣医療では以前から実施されている外科療法をはじめ、放射線療法、化学療法、免疫療法などの様々な方法を駆使しがんを治療しています。それこそ医学と遜色のないものもあり、日夜世界中の研究者が先を争って成果を報告し続けています。しかし、最新が最良であるとは限らないのが世の常であり、治療とは生体のために行うものであることは言うまでもなく、これを無視した方法はまさに障害にしかありません。とくにがんなどという、治すことが困難な病に立ち向かうときは、生体の体力と病勢をよく把握し、治療実施の目的を十分検討した上で治療法を選択しなければなりません。この治療実施の目的とはすなわち、がん治療における根治治療、緩和治療および対症治療という概念であり、これらはそれぞれで

治療に対する姿勢も方法も大きく異なります。

少々の犠牲を払っても完全に治療を狙えるものなら根治治療はがん治療の最善ですが、時にはがんを引き分けたほうが動物のためにも私たちのためにもより良い場合があります。したがって、我々医療者はがんを診、生体を見、さらに己も観たうえで、知りうる限りの情報を参考にしながらオーナーとじっくり相談し、本や文献には絶対に載っていない全てにととの最良を引き出す方法を模索しなければならないのです。

3.がん治療の心得

自分であれ、動物であれ、がんとの闘病という状況に一旦身をおいた私たちは、突然自分にふりかかってきた不運と袋小路の希望の見えない未来に打ちのめされ、ともすれば立ち直れないほどの衝撃を受けます。しかし、長年共に生きてくれたかけがえのない動物の一大事に、彼らにとって唯一の私たちがいつまでも弱音を吐いているわけにはいきません。動物が命をあきらめてないうちは、私たちが先にあきらめるわけにはいかないのです。ここは持てる力を振り絞って、時には持っていない力も無理やり出して彼らのそばで力を貸してやらなければなりません。皆さんは彼らにとっての最強の味方であり、すべての治療を成功に持っていき最後の力なのです。がんという病気は、外科医が最高レベルのメスを振るおうとも、内科医が最新の治療薬を使おうともそれだけで治るような生易しいものではありません。その証拠に太古からあるこの病気を未だに人類は克服できないでいます。しかし、十数年前より私がかん治療を始めて以来、現代の医学でも説明できない奇跡的回復を少なからず見てきたのも事実です。それらはすべて、医療技術ではなく動物を支える皆さんの力がなせる業なのでしょう。医療を信じて、動物を信じて、そしてなによりも自分を信じてこそがん治療は成功するのです。そして、このがん治療の成功のなかでも一番大切なことは、ただ闇雲に延命するのではなく良く生かしてあげることです。そのためには私たちは彼らが必要としていることをできるだけ理解するとともに、決して人まかせではない主体性を持った治療をしてあげなければなりません。動物と共に今の自分にあるすべての力と味方と運を引き寄せて、一緒に闘ってやるのが私たちの精一杯の愛情なのです。